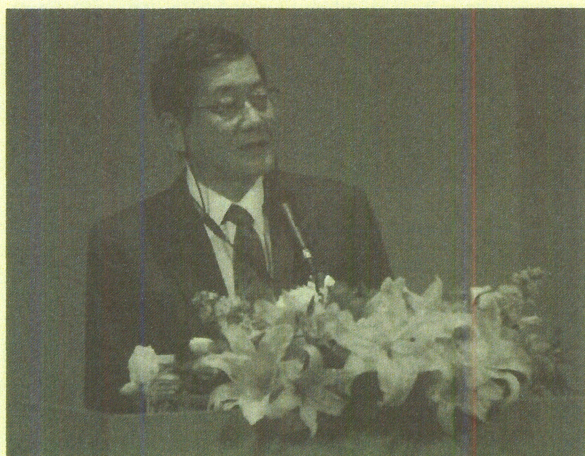


神大の先輩、福島県佐藤雄平知事

柴田 直子

去る11月27日、「神奈川大学創立80周年記念事業」の一環として、福島県知事佐藤雄平氏をお迎えして、「地方自治の現在」と題する講演会を実施した。

I 一昨年、私が担当する「地方自治論」で、4章4節「首長」の第3項「首長の経歴」の授業していたときのこと。現在の市町村、都道府県の首長は、どのようなバックグラウンドをもった人々なのか、「当選前の職業」を記した、レジュメの表を見せながら説明し、そして、ふと、「実は、神奈川大学出身の知事さんがいるのですよ」、と言った。すると、下を見て、静かにノートをとっていた学生たちが、突然、一斉に、顔を上げ、教壇に目を向けた。正直、学生全員からあんな風に見つめられるのは、(試験範囲の発表をするときを除き・・・) そうあるわけではないので、つい、ドキッとしてしまった。学生の目は、いつにも増して(?)キラキラとしており、そのとき、いつか福島県知事に、講演に来ていただきたい、と思い始めた。神奈川大学創立80周年という絶好の機会を迎え、今回の講演会の企画を法学研究所に提出した。



II さて、講演会でのお話は、現在、知事職の3年目である、佐藤雄平氏をつくってきた、その半生の物語であった。話は、もちろん、神奈川大学で過ごした学生時代から始まる。とりわけ、フロイデコール(男声合唱団)での活動や、寮生活・下宿生活の中での友人関係は、知事にとって思い出深いようであった。

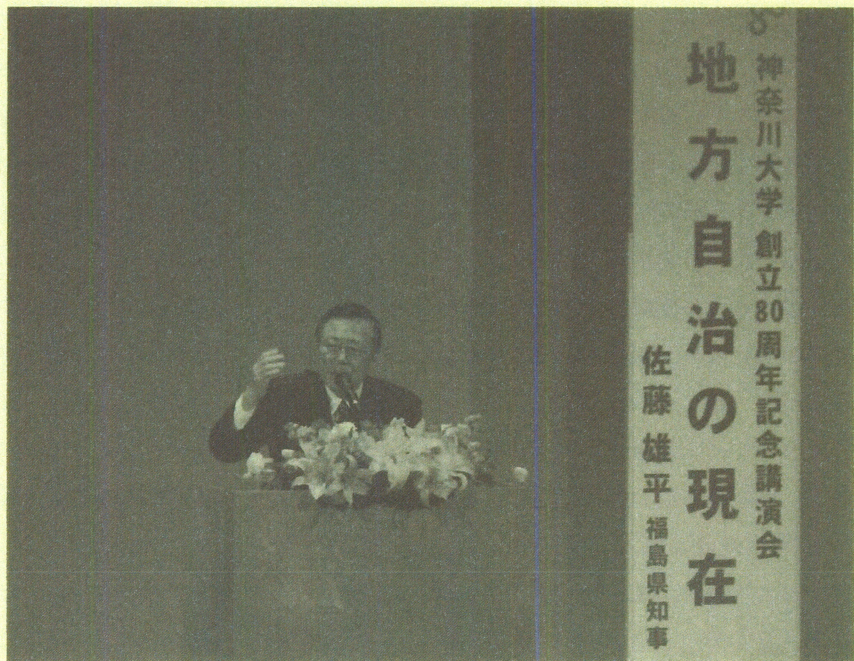
神奈川大学経済学部を卒業した後は、叔父である、福島の国会議員の秘書となる。秘書時代は、長く20年に及んだ。秘書時代のエピソードで、最も印象的だったのは、中選挙区にまつわる苦労話である。「中選挙区は、大変だった」という話をよく聞かすが、それがどういうことなのか、とてもよく分かるエピソードである。

中選挙区制においては、同じ選挙区、同じ政党の国会議員同士が、掲げる政策も違わないところで競争しなければならない。その時の方法の1つが、有権者へのサービス合戦であったという。例えば、「勤労奉仕団」として、皇居などをお掃除しに東京にやってくる地元の主婦の方たちがいる。この方たちに、「一日国会見学」ツアーをし、そして、「ご奉仕」の後には、ご苦労をねぎらいに行く。ところで、このとき、まず、肝心なのが、東京駅に到着する「奉仕団」の方々を、同じ地元の別の国会議員秘書たちよりも早く迎えに行き、旅館まで案内することである。ライバル秘書たちが、競争して、一足早く迎えにこようとするなら、今度は、相手より、1つ前の「上野駅」まで迎えに行く。そうやって、自分が秘書として仕える議員さんに対して、より好印象をもってもらうために、気配りをし、アピールするのである。

平成10年、参議院議員に出馬する機会が、偶然訪れたという。1期目は、「沖縄及び北方問題に関する特別委員会・委員長」という長い肩書きの職等を果たす。2期目当選後は、「予算委員会・筆頭理事」として、「自ら努力してもなかなか日の当たらない人がある。日の当たらない地方がある。そこに、勢いや意欲を持たせることこそが、政治や行政の要諦である」という思いの下で、進み始めた。ところが、その途中、突然に、福島

県知事の辞任に伴い、福島県知事への立候補を打診された。佐藤知事は、この打診に対して、「30分」で、決断をしたという。その30分で、何を考え、決断されたのか、次回には、是非、お聞きしたいところである。

Ⅲ 福島県知事として、佐藤知事は、3つの政策を挙げている。1つ目が、経済施策。活力ある福島県を目指す。2つ目が、県民の安全・安心。福島県では、医者不足の問題、それから、発電所の問題がある。そして、3つ目が、県民運動。県民性のすばらしいところを継続していくのである。白虎隊の精神である「什の掟」。常磐炭鉱のフラガールや花見山。福島県は野口英世の出身地でもある。現在、県内の各地の「宝」探しをしているという。東京や神奈川に出て行った人が、故郷と半分半分に住めるような、



2 地域居住を実現など、現在の福島県の課題について、時折「会津弁」を織り交ぜながら、力説された。

Ⅳ 副知事を2人おいた、3役体制をしいている現在においても、知事は年間1963回、365日で割ると、1日平均5.4回の会議をこなしているのだという。頻繁にはお越しいただけないだろうが、また時折、母校で、そのときどきの「地方自治の現在」をお話ししていただけたら、と思う。宮崎県や大阪府などで、個性の豊かな知事が登場し、「知事職」に対する関心が、地方自治への関心を押し上げている。長年、「国会議員秘書」として、地元の有権者のために働き続けてこられたご経歴をもつ、佐藤知事が、今後、どのような政策を行い、どのような知事として、ご活躍されるのか、来年度のレジュメの4章4節3項の部分、大幅加筆をしなければ、と思う。